

Unacknowledged

Steven M. Greer M.D.

Copyright 1996

認められざるもの

スティーブン・M・グリア 医師

著作権 1996 年

([SiriusDisclosure のウェブサイトより](#))

政府は秘密を隠しておけるか？

ある本当に大きな秘密 - あらゆる時代の中で最大の秘密を？ 政治家と政府指導者のどんなつまらない過ちもゴールデンアワーのニュースになるときに、政府は世界の歴史の中で最も驚愕すべき発見 - 地球外知性体の存在 - を我々から隠せるものだろうか？

そう、イエスでもあり—そして、ノーでもある。

はじめに、政府という概念を定義し直さなければならない。というのは、まず ‘我ら人民’ の政府があるからである。選ばれ任命された公務員、国民の代表、行政官、立法府、および司法府、等々、中学の社会科にあるような。

しかし、認められざる ‘政府’ もまた存在する： 深く隠蔽された ‘政府’、深い闇のプロジェクト、雇われた従業員と企業、 ‘我ら人民’ の政府が認められざる ‘政府’ について知ることを阻む任務を負った、謎の中間役人たち。

左手がしていることを右手は知らない - しばしば知ろうとするが...

我々は少々先走りし過ぎているようだ。はじめに幾つか背景を述べたい。

この 20 世紀の後半にあって、実在する秘密がいかに維持されているか、私はほぼ 6 年の間ひそかに研究してきた。私が知ったのは驚くべき事柄であった。そして正直に言うと、信じがたいものだった。今あなたが読もうとしている内容は真実である - だが、3 年前に誰かがこれを私に話していたとしても、私はそれを信じなかつただろうと認める。あなたはこの論説の残りの部分をつくり話として読むかもしれない。その内容のすべてを距離を置いて遠くから眺めたなら、あなたはより楽な気分になるかもしれない。しかし、これは本当のことだという気持ちも幾らかは持ってほしい。

この論説で扱う内容は UFO/ET が現実のものなのか、あるいは地球を訪問しているのか、ということについてはない。まずそのことから片付けよう。というのも、それはそうし易い部分だからである： UFO は現実である； それらは地球外起源である； 彼らは数十年間（数世紀でないとしても）にわたって、我々の周囲にいる； 彼らが敵対的であるという証拠はない； 我々を訪問しているのはおそらく複数の種族である； ‘政府’ のある部分はこれを少なくとも 50 年前から知っていた。

この問題のさらに難しい部分は、この異常な物事は現実でありながら、それでもなお何かしら非現実的で、隠され、秘密にされ、得体の知れないものであるということを理解することだ。公式の政府 - およびメディアと科学界における公式な真実の管理人たち - がこれほどまでに長く欺かれてきたのは、歴史上に例を見ないこの秘密計画の精巧さ、深さ、広さ、遍在性のたまものだ。

実に、いかにして - そしてなぜ - この偽装行為が存在してきたかの物語は、その奇怪さ、不思議さ、信じ難さにおいて、地球外現象そのものを超えている。実際のところ、秘密の効力はその秘密の性質の驚くべき信じ難さそのものに関係しているようだ。別の言い方をすれば、これらの秘密プロジェクトの理由、方法、事の起こりのいきさつは、あまりにも奇怪で信じがたいために、そのこと自体がそれらの最良の覆いになっている。それに行き当たっても誰もそれを信じないだろう。それは完全に限度を超えている。

正直に言うと、あなたがこれから読もうとしていることへの私自身の最初の反応は、こうであった。“本当だろうか...” しかし、その後の確証に次ぐ確証、独立した証拠に次ぐ独立した証拠により、私はそれを確信するに至った。そのとき、私はこう言っていた。“何てことだ...”

ここでの紙数の制限から、私は 6 年間の緊迫した舞台裏での研究の主要部分だけをあなたにお伝えする。いつの日か、話の全貌、名前も何もかもが語られるときがくることを願う。だが今のところは、大まかな実態と詳細の幾つかを述べることにしか許されない。この情報は、非常に高い地位にあり、かつこの問題と関係のある軍、情報機関、政府、および民間企業の情報源との個人的な、内密の、慎重をきわめた会合と長時間にわたる議論によりもたらされたものである。これらの秘密プロジェクトに関する真実を研究する中で、私は国家首脳、王族、CIA（中央情報局）高官、NSA（国家安全保障局）諜報員、米国および外国の軍指導者、政治指導者、先端技術企業の契約業者といった人々と会うことになった。その過程は消耗的で、過酷で、衝撃的だった。安全と慎重を期するために、ここでは彼らの名前を当分伏せておかなければならない； あなたがこれを読み終わったとき、その理由が明らかになるだろう。

CSETI（地球外知性体研究センター）プロジェクトにおけるこの活動局面は、1993 年 7 月に本格化した。このとき、軍および民間にあって UFO 問題に関わりを持つ少人数のグループが、私の要請に応じて集まり、政府および軍と連携する最良の方法を議論したのである。作戦上の観点から、CSETI は指揮系統内部に、我々が地球外文明とコンタクトするためにしていることを知る、高位の接触者（POC）を必要とした。我々は、意図的であれ偶発的であれ、我々の取り組みに軍／情報機

関／政府からの妨害が入らないようにしたかったし、我々の取り組みは一種の民間外交と見なされるべきであるため、米国の内外を問わず、いかなる妨害からも我々を保護する不干渉命令があってしかるべきだ、ということも明確にしておきたかった。その前年、CSETI は英国とメキシコにおいて、ほとんど着陸に近い二つのコンタクト事象を実現させていた。このため、事態の進展を考慮し、我々のチームと共に我々にとっては客人である訪問者たちが、安全にコンタクトを進められる環境を確保しておきたかったのである。

この会合に続く数ヶ月の間に、我々のチームのメンバーたちは、政府、軍、情報機関、政治、国際組織、民間といった様々な分野における世界中の指導者たちと議論し、背景説明をしなければならなかった。そこで我々が知ったことは、現実とも思えない、想像を絶する、異様なものだった。

ことの始まりは、少なくとも第二次大戦にまで遡る。米国政府の一部の当局者は、人類が孤独ではないこと、一部の戦場の周囲を敵のものでも味方のものでない進歩した機械が飛び回っていることを知っていた、ということ了我々は知った。親類が第二次大戦の高名なパイロットだったという、医療の同僚でもある友人が私に語ったところでは、このパイロットは、これらのいわゆる ‘フー・ファイターズ’ が何であるかを突き止めるために、大統領命令によりヨーロッパに送られた。彼は大統領への報告で、それらは地球外宇宙機だと述べた。

これ以後、事態は益々奇妙になっていく。後にある CIA 長官の右腕になった一人の退役将軍は、私にこう語った： 1946 年に軍将校だった彼の任務は、アイダホ上空で起きた一連の白昼 UFO 目撃事件に関して ‘でたらめな’ 文書を作成することであった。彼が言うには、人々は UFO が現実であることを知っていた。しかし間もなく冷戦が始まり、その後には幾つかの戦争が続いた。人々は誰もが地球規模の熱核戦争に懸念を持った - だから、これらの正体の知れない、しかし無害な ET について心配する暇など、誰にもなかった。

確かに、そんな暇はなかった。

それぞれ独立して確証する複数の新たな証人たちが、1947 年のニューメキシコ、1948 年のアリゾナ州キングマンでの ET 宇宙機の墜落と回収について我々に語った。この ‘回収された宇宙機’こそが今や確実に誰かの注意を引くことになり、以後、標的の名前は ‘進歩した地球外技術’ になった。それはどのように機能するのか； 何に使えるのか； 彼らはどう使うのか； 我々より先にソビエトがそれを解明しないか； それが漏れて誰か新しいヒトラーが世界支配のために使うことになりはしないか； 人々がそれを知ったらパニックにならないか； もし...

次々とわき起こる、当時答えが見つからなかった疑問の数々。

こうして、古今未曾有の秘密プロジェクトが生まれた。

要するに、当時我々は水爆の開発を行っていた - そして我々の宿敵ソビエトは、躍起になって我々の後を追いかけていた。すでに危うくなっていた世界秩序をさらに不安定にするために、真空管や内燃機関の世界に恒星間推進技術を持ち込む以上のものがあつたのだろうか？ 我々が技術的能力の飛躍に直面していたというのは控えめな表現だ。我々は我々自身のために、それが安全に行なわれることを望んだ。

こうして、‘国家安全保障’の見地から、どんな犠牲を払ってでもこの問題全体を隠蔽しておくことが強く求められた。そしてそのために、あらゆる手段がとられた。

しかし、この計画を台無しにする、とても大きな一つの障害がせつせと活動していた： ET はアメリカやそれ以外の世界の空を、ときには編隊を組んで数千人の人々に目撃されながら飛んでいたのである。さあ、これをどうやって隠すか？

心がそれを隠すのである。それはジョージ・オーウェル式のひねりの効いた仕掛けで、第二次大戦中の過去の心理戦研究により、実際、以下のことが知られていた。もし頻繁に嘘が言い立てられ、特に‘ひとかどの’人物によってそれがなされれば、人々はそれを信じるようになる。第二次大戦中に心理戦の達人であった中の一人が、1940年代終わり頃にこの任務を任されたようだ。ウォルター・ベデル・スミス将軍が、この問題の心理戦部分を調整することに関与し、また大きな嘘を立ち上げることに一役買った： UFO は、たとえ百万人がそれを目撃しようとも存在しない。

一般の人々に知られるようになったすべての目撃に対して、当局による否定が行なわれ、さらに悪いことに、事件とその当事者が嘲笑の対象になった。ハーバード大学の天文学者ドナルド・メンツェルが引っ張り出され、世界に向けて次の声明を出した。それはすべてヒステリーであり、UFO など実在せず、すべては馬鹿げた話であると。

こうして、1950年代になっても真実を知っているのは比較的少数のグループだけで、真実は彼らのうちにとどまっていた。メディアの注目を引くような出来事が起きると、当局者がそれを否定し、馬鹿げた話であるとした。人間というものは概して臆病な社会的動物であり、我々自身認めるように、むしろレミング（*和名タビネズミ、北極近辺に生息）に近い。だから、困惑や嘲笑や社会的疎外を避けたいと思えば、UFOを自分の目で間近に見たとしても、それについては沈黙を守ることが明らかになった。これに加えて、自然発生レベルの気違いや変人などのような、一般的な社会現象と連動させる形で、市民のUFO関連団体の中で、馬鹿げた奇妙なほら話が積極的に奨励された。もうお分かりだろう。こうしてまともな人間 - 特に‘まともな’メディア、科学者、政治的指導者 - なら誰でも、これを避けるべき‘好ましくない話題’と見なすことになった。

（これまで6年間の私の経験を振り返れば、彼らを非難することなど私にはできない...）

しかし、これらすべてはいかにもありがちな話だ。事態の異様な展開は、秘密プロジェクトのため

のある新しいモデルが徐々に展開しだした 1950 年代に始まった； フランケンシュタインがつくられたのだ。そして、今やそれは自らの意志を獲得し、手術台を離れ、すべての拘束を断ち切り、我々の間を歩き回っている。

1993 年の終わりから 1994 年、1995 年、1996 年と、会合を重ねるたびに衝撃的な真実が浮かび上がってきた。ともかく、1990 年代に至るまでに大変な何かが起きていた： この問題に関わる事柄の全体は、その大部分が民間に移され、十層の深さの闇に沈み、米国または他の政府の憲法による指揮系統を離れて活動するようになった。私には今、あなたが何を考えているかが分かる - 私も最初は同じことを考えた - だが、私の話に最後まで耳を傾けていただきたい。

1993 年 7 月の最初の会合から数箇月のうちに、私や我々のチームのメンバーたちは、CIA、議会、クリントン政権、国連、統合参謀本部、英国その他の軍関係の、きわめて高い地位にある高官たちと会うことになった。我々の最初の立場はまず、冷戦が終わった今、これらの問題について重要な情報公開ができる機会が到来したのだということをし、これらの人々に対し明らかにすることだった。この問題を国際社会に返すときがきたのだ。本当か？ とんでもない！ ほっとんど一つの例外もなく、軍、情報分野、政界、国家安全保障方面の指導者たちは、真実を語るときがきたことに同意した。問題は、彼らが真実にも、データにも、個々の事件にも、あるいは技術にも、また保存されている ET の遺体（それらが現在どこにあるか、我々は知っている。それらはもはやライトーパターソン空軍基地にはない）のいずれにも、接近できる手段を持っていなかったことである。

私が蚊帳の内にいると考えた人々は、蚊帳の外にいた。そしてショーを演出している者たちは、秘密の工作員と民間企業の利害関係者の奇妙な連合体だった。このときから、我々の進む道は鏡の向こう側の世界となった。

私の先祖は、ノースカロライナでアメリカ革命のために戦った。彼らは憲法と代議員による政府を創設するために戦った。その憲法に何が起きてしまったのか、私は驚いた。ひどい悪夢を見たように、私は夢から覚めてそれが本当でないと分かることを祈り続けた。どうしたらこれを人々に伝えられるか？ 誰がそれを信じるか？ ノースカロライナの一医師にとっては、進歩した地球外知性体が我々を訪問していると主張し続けることだけでも、とんでもなく大変なことだ。しかし、これは？

私はレーガン大統領の国家安全保障会議のスタッフだった友人に、どうしてこんなことが可能なのか、訊いてみた。政府、軍、上級情報機関、および国家安全保障部門にいる世界で最も力のある人々が、これについて知らないばかりか、この情報に接近する手段さえ持たない。などということがどうして起こり得るのか？ 私は次のように訊いた。もし大統領に誰がそれを本当に知っているかを知らせ、大統領が彼らを大統領執務室に呼び出し、“私は合衆国大統領だ、これについて知っていることを全部話せ”と言ったら、彼らはどうするかと。

彼は笑い、次のように言った。“スティーブ、もし彼らが大統領に知られたくないと思ったら、彼らはただ嘘をつき、そんなものは存在しないと言うだけだ。ずっとそうしてきたのだ...” 私はこの皮肉な言葉に驚いた。また、明らかに憲法が逆転していることにも。

政府の高官たちを‘守る’ための‘もっともらしい否認（plausibledeniability）’（*まずいことが発覚した場合に備えて、もっともらしい否認を可能にして、逃げ場をつくっておくこと）の策略として、これはどうやらある種の機密事項を扱う分野で行なわれているようだ。そして UFO 問題は、すべての中で最大の機密事項なのである。

重要な秘密情報なら何でも知る立場にあると国民の誰もが考えるような、高い地位にいるある情報関係機関の指導者との会合で、私は次のことを知った。この高官は、UFO が実在することを知っているにもかかわらず、過去の情報にも現在の情報にも、ET の問題を扱うプロジェクトにも、接近する手段を持っていなかった。またもや、私は呆然とした。

召喚権限と最高機密取扱許可（top secret clearance）を持つ、きわめて高い地位の上院調査官たちも、同じだった。統合参謀本部の人たちも、同じだった。国連の高官たちも、同じだった。英国国防省の高官たちも、同じだった。国家首脳たちもまた、同じだった。

物事はこのように進み、さらに続いた。これは偽りではない；これらの会合は、親しい内密の接触者と友人たちにより準備された。皮肉なことに、これらの指導者たちは、この秘密の混乱を本来の状態に戻すために、我々に情報提供、分析、そしておかしなことだが、行動を依頼してきたのである。私は妻と四人の子供、1 台のミニバン、1 匹のゴールデンレトリバーと暮らすノースカロライナの田舎医師にすぎない。そう指摘しても、この事態は変えられなかった。だから私は、‘空き時間’を使って、私のできることをしてきたのである。

認められざる特殊接近プロジェクト（UNACKNOWLEDGED SPECIAL ACCESS PROJECTS）。USAPS。この言葉 - 実際には概念 - は、把握するまでしばらく時間がかかった。単純と言われるかもしれないが、私は民主主義、憲法、大統領職、議会の重要性といったものを心から信じている。しかし、このような異様な観念もある時点で私の心に同化し、この新しい現実の一部にならなければならなかった。大統領、議会、法廷、国連が存在し、その他の世界の指導者たちがいる。彼らは税、通貨、その他あれやこれやの計画を心配する。しかし、本当に大きなもの - それは彼らを除外している。結局のところ、これらの人々は 2 年か 4 年ごとに來ては去っていく。彼らが知らないことは、彼らに何の害も与えない。そのうえ、我々は彼らがこれらの秘密プロジェクトについて何も知らないでいるように便宜を図る。とにかく、これらのプロジェクトは‘認められざるもの（UNACKNOWLEDGED）’であり、ゆえにそれらは事実上どこにも存在しない...

これらのプロジェクトの内部にいる人々と共に働く中で、私はきわめて急勾配な学習曲線に耐える必要があったことを、読者は理解しなければならない。軍にも政府にも情報分野にも身を置いたこ

とがなかった私にとり、これは初めてのことばかりだった。大変な危険を冒してこの情報を私に伝えてくれた人々の信頼を裏切るわけにはいかないことを、どうか理解して欲しい。人々はこれまで - 最近も - これより些細な、はるかに些細な理由で殺されてきたのである。

USAPS とは何か？ それは極秘の区画化されたプロジェクトで、最高機密取扱許可を持つ人間でさえ特殊な接近手段を要し、かつそれは認められていない。つまり、あなたの上司、司令官、長官、大統領など、誰か - 誰でもよいが - がそれについてあなたに訊ねたとする。あなたは、そのようなプロジェクトは存在しないと答える。あなたは嘘をついているのだ。

これら USAPS にいる者たちは、彼らのプロジェクトを秘密にしておくことについては本気であり、内部事情を隠し、他部局の者たちと国民に偽情報を与え続けるためには、ほとんど何でもする。

そして、すべての USAPS の元祖は UFO/ET 問題である。

憶えておいてほしいのだが、ウィルバート・スミスによる 1950 年のカナダ政府最高機密文書には、ある秘密の米国グループが、その背後の技術も含めた UFO 問題に取り組んでいることが分かったとあり、また、これは水爆の開発関連の機密をも超える、米国政府最高の機密であるとも述べられているのだ。

さて、このプロジェクトが 50 年経ったらどうなるか、想像してみしてほしい。橋の下を水はどれほど流れたことか。50 年もの歳月の間、プロジェクトの様々な側面に膨大な資金が使われた： 逆行分析 (reverse engineering) による地球外技術の解明； 非線形の推進および通信システムの実験； 国民に対する大規模な偽情報工作と、憲法により選出され指名された当局者および組織への虚言； 等々。

この積極的な偽情報工作に加え - 国民を欺き罠にかけ、国民の目を本当の活動から逸らすための偽 ET 事件の捏造や偽装。誘拐。動物切断 (mutilation)。宇宙や地下の基地にいる雑種混血の赤ん坊。世界政府勢力と邪悪な宇宙人との間の秘密協定。その他、うんざりするほどの数々。悲惨なことに、大衆メディア、出版社、UFO 関連団体／業界、および一般社会が、これらの話を節度もなく鵜呑みにする。

この馬鹿げたことは、資金も専門知識もない民間 UFO 関連団体に対する効果的な罠であるばかりか、'まともな' 科学者、主要メディア、公職にある人々を沈黙させるのに必要な、狂気と悪趣味の印象をつくり出す。それは問題全体を、安全に、彼らのレーダー画面から外れたままにしておくのだ。

1940 年代半ばから 1950 年代の半ば、さらにその終わりにかけて、これらの事柄が進行するかたわら、この秘密グループはやや型にはまった慣例的なものだった。トルーマン政権とアイゼンハワー政権の多くの当局者たちはそれについて知っており、関わってもいた。それは当面秘密にされる

べき、本当の国家安全保障上の重要事項と考えられたのである。だから、彼らは忠誠心を持って行動し、我々の立憲民主主義の妥当な限度内にあったと私は信じる。

しかし、アイゼンハワー時代の半ばから終わりにかけて、合法的に蚊帳の内にいるべき人々が押しのけられる傾向が徐々に現れてきたようだ。これがアイゼンハワー時代の終わり頃とケネディ政権時代に起きたことだと確証する、複数の情報源を我々は持っている。

直接証人たちが我々に語ったところでは、アイゼンハワーは UFO/ET 問題の多くの重要な側面について、自分が闇の中に置かれていることに憤慨していた。彼は ET 宇宙機と遺体を見ていたが、その一方で異常なプロジェクトが進行しており、自分が蚊帳の外に置かれていることを知った。だから、五つ星将軍であり保守的な共和党员であったにもかかわらず、彼が大統領として国民に向けた最後の演説で‘軍産複合体’について警告したことに何の不思議があるのか？ 軍産複合体という言葉を考え出し、その行き過ぎの危険性を初めて我々に警告したのは - アビー・ホフマン（*反体制活動家）ではなく - この五つ星将軍だったことを、人々は忘れている。なぜか？ 彼がそれらの行き過ぎを、間近に自分の目で見ていたからである。

1963 年 6 月まで話を進めよう。ケネディは、“私はベルリン市民だ” という有名な演説をするためにベルリンに飛んでいる。エアフォースワンの機上には、次のように語る一人の軍人がいた： 長いフライトの途上でケネディは、ある時点からこの将校と UFO 問題を議論し始めた。自分は UFO が現実であることを知っており、証拠を見たことがある、と彼は認めたが、次にこう述べて、その将校を驚かせた。“この問題全体が私の管理外にある。なぜなのか私には分からない...” ケネディは、真実が明かされることを望んでいるが、自分にはそれができない、と言った。そして、この問題が自分の管理外にあり、なぜなのかその理由が分からないと述べているのは、軍最高司令官である米国大統領なのだ。私は、彼が同年その後に暗殺される前に、真実を解明したのではないかと考えている。

アイゼンハワー、ケネディ、クリントン政権の重要人物たち、軍の指導者たち、情報機関の指導者たち、外国の指導者たち。誰もが蚊帳の外である。しかし、誰もがそれが事実であることを知っている。何が起きているのか？

USAPS は物語の一部にすぎない。より小さな部分である。軍産複合体への警戒を呼びかけたアイゼンハワーの言葉を覚えているだろうか？ 重要な意味を持つ言葉： 産業の (industrial)、民間の (private)、民営化された (privatized)。1995 年 7 月に元英国国防参謀長とこの問題を議論する中で、私は彼も同様に蚊帳の外に置かれていることを知った。本当の秘密は、MI5（英国軍情報部第 5 課）と MoD（国防省）の頂点にいた人間をさえも寄せつけないことを、我々はあらためて知ったのである。答えの一部は USAPS にある。だが、もっと大きな部分は民間の契約業者の組織にある。

米国政府はほとんど何もしていない（ありがたいことだが...）。あの B-2 ステルス爆撃機は米国政府がつくっているのではない。米国政府のために民間企業がつくっているのだ。そして、民間企業は USAPS よりもさらにうまく秘密を守る。確かにそうだ： コカコーラの製造法はこれまでずっと誰も知らないできた。米国大統領でさえそれを知ることとはできない。その製造法は秘密であり、民間所有である。

さて、もしあなたが望むなら、民間所有の秘密の独占権を USAPS に結合し一体化することで、事実上誰も侵入できない秘密の要塞をつくれるだろう。なぜなら、もしあなたが民間部門からその秘密に近づこうとすると、それは所有権により保護されており、公的部門や政府から近づこうとすると、それは USAPS の中に隠されているからである。そして、あなたや私が通常考える ‘政府’ には何の手がかりもない。

だから、個人的な経験から私はあなたに次のように言える。もしあなたが指導者たちにこのことを知らせたなら、彼らは両手で頭を抱え、かつて私がそうであったようにこう言うだろう。“何てことだ...”

では、この秘密活動の本質的な特徴は何か？ 以下に述べることは、1996 年春の時点における侵入と調査に基づいている：

信頼できる情報筋から私に教えられた最近のコード名： PI-40。

コード名の意味： 不明

説明： PI-40 は、準政府的な、USAPS に関係する準民間組織であり、国際的／国家横断的に活動する。活動の主要部分は、進歩した地球外技術の解明と応用に関する、民間企業の ‘他から頼まれた仕事’ の契約プロジェクトに集中している。関連する区画化された単位（ユニット）は、これもまた USAPS であるが、偽情報工作、国民を欺く活動、積極的な偽情報工作、いわゆる誘拐と動物切断、偵察と UFO 追跡、宇宙空間兵器システム、および特殊連絡グループ（たとえば対メディア、対政治指導者、対科学界、対実業界、等々）に関与する。この組織は、政府、USAPS、および民間企業の複合体と考えてよい。

PI-40 の主な構成要素は、まず USAPS に関係した軍と情報機関の中間工作人員、ある種の先端技術企業内の USAPS または闇の単位（ユニット）、国際政策分析業界、ある種の宗教団体、科学界とメディアの内部にいる選ばれた連絡係、他にもあるが、とりわけこういったものである。これらの組織と人物の一部を我々は知っているが、残りの大部分は特定されていない。

PI-40 の政策決定組織を構成するおよそ 3 分の 1 から 2 分の 1 のメンバーは、今この問題についてある種の情報公開を行なうことを支持している。彼らは過去の行き過ぎにあまり関わっていない、

概して若い構成員である。残りの構成員は、近い将来の公開については反対か葛藤の状態にある。

実際の方針と政策決定は、USAPS 関連の軍や情報部門関係者ではなく、現在は圧倒的に民間民生部門の手中にあるようだ。ただし、活動のある分野では顕著な相対的自律性が見られるとの情報も幾つかある。我々の現在の評価では、ある種の秘密活動と公開の可否について、PI-40 内部で論争が激しくなっている。

‘闇の’ または USAPS プロジェクト内の多くの区画化された活動は、その任務のために働いている人々が、それが UFO/ET に関係したものとは気付かない仕組みになっている。たとえば、いわゆる‘スターウォーズ’の取り組み、すなわち SDI（戦略防衛構想）の幾つかの側面は、地球の近傍に侵入する地球外宇宙機を標的にする意図を持っている。しかし、SDI 計画内部の科学者や作業員の圧倒的多数はこれを知らない。

我々が三つの別々の確かな情報源から知ったところでは、1990 年代初め以来、実験的な宇宙空間兵器システムにより、少なくとも 2 機の地球外宇宙機が標的にされ破壊された。

ホワイトハウス当局者を含む政治指導者たち、軍指導者たち、議会指導者たち、国連指導者たち、および世界の他の指導者たちの圧倒的多数は、この問題について定期的な背景説明を受けていない。査問が行なわれたとしても、彼らはその活動について何も教えられないし、いかなる活動の存在も確認されない。概してこの秘密組織の性質により、指導者たちは誰に対してそのような査問を行なったらよいかさえ分らない。

国際的な協調体制が広範囲に存在する。ただし、何人かの証人が述べるところでは、ある国々、特に中国は、幾分独立した行動計画を積極的に進めている。

活動の主要拠点は、広範囲に分散している民間施設を別にして、カリフォルニア州エドワーズ空軍基地、ネバダ州ネリス空軍基地、特に S4 とそれに隣接する施設、ニューメキシコ州ロスアラモス、アリゾナ州ファチュカ基地（陸軍情報司令部）、アラバマ州レッドストーン兵器庫、飛行機でしか行けないユタ州の僻地にある比較的新しい拡張中の地下施設など、とりわけこういった場所である。その他の施設と活動拠点は、英国、オーストラリア、およびロシアなどを含む多くの国々に存在する。多くの機関が、これらの活動に関与する隠蔽された、闇の、USAPS に関係する部署を持っており、その中には国家偵察局（NRO）、国家安全保障局（NSA）、中央情報局（CIA）、国防情報局（DIA）、空軍特別捜査局（AFOSI）、海軍情報局、陸軍情報局、空軍情報局、連邦捜査局（FBI）、その他が含まれる。さらに多くの個人、民間、および企業の組織が、重要な関与をしている。科学、技術、および先端技術に関する活動の大部分は、民間の製造業と研究機関に集中している。重要な - そして殺人をも厭わない - 警備は、民間の契約業者が担っている。

これらの機関と民間グループにいる職員および指導部は、そのすべてではないにしても大部分は、

これらの区画化された認められざる活動について、関わってもいないし知ってもいない。この理由により、特定の機関または企業組織を全面的に非難することは、いずれもまったく根拠がない。‘もっともらしい否認’は多くの段階で存在する。さらに、専門化と区画化により、そこにいる人々が UFO/ET の問題に関係した仕事をしていると気付かずに、多くの活動が存続できるのだ。

協力に対する見返りと秘密保持義務に違反した場合の罰は、共に尋常ではない。軍上層部にいる情報源が我々に語ったところでは、過去数十年間にわたり、協力を確実にするために少なくとも 1 万人の人間がそれぞれ 100 万ドル以上を受け取ってきた。罰に関しては、沈黙の掟を破るなど、その家族が脅迫を受けてきた、信頼すべき複数の事例を我々は知っている。また、我々は、最近 ‘自殺’ とされた民間契約企業の二つの事例を知っている。それらは、被害者たちが ET 技術に関係する逆行分析 (reverse engineering) の秘密保持義務に違反し始めてから起きたことだった。

資金： 議会のある上級調査官が個人的に我々に語ったところでは、‘闇の予算’がこの活動と、やはり USAPS である同様の活動に使われているようだ。この ‘闇の予算’は控えめに見て年間 100 億ドル、おそらくは年間 800 億ドルを超えている。UFO/ET 活動だけにどれだけ使われているかは、現時点では不明である。加えて、相当の資金が海外、民間、および様々な機関の財源から引き出されている。これらの活動により調達される額がどれほどになるのかも、我々には明らかでない。

これは現時点で我々が知ったことの一部である。明らかに、ここには答えよりもさらに多くの疑問があり、知られていないことは知られていることを上回る。それでも我々は、この組織の活動形態の理解において、重要で歴史的な前進をしたと思う。この一般的な評価を、私は幾人かの重要な軍関係者、政治家、政策研究機関の人々に見せたが、これがきわめて正確で、彼らが個別に到達した独自の評価と一致すると見なせることに私は驚いた。

しかし、さらに大きな疑問は、なぜ？ である。世の中では一般に、何が、誰が、いかに、は常に、なぜ、よりも簡単である。なぜ、秘密が維持され、偽装が続いているのか？

私はこの危険な方向へあまりにも深入りすることを躊躇する。というのは、我々はここで究極の動機と目的に関係した疑問にのめり込んでいるからだ。それは常に幾分つかみどころがない領域であり、最良の場合でも曖昧である。そして、私が思うに、これはありふれた問題などではなく、このような異常な一か八かの行動の背後にある感情、動機、および目的は、おそらく複雑で調和がとれていない。実際、そのような動機は、おそらく当初の崇高で善意あるものから邪悪なものまでとも入り組んでいるのだ。

1994 年に、バリー・ゴールドウォーター(29)上院議員は私にこう語った： ET 問題を取り巻く秘密は “当時の最悪の失敗であり、そして今の最悪の失敗だ...” 私はここで上院議員に同意したいと思うが、秘密に駆り立てるものは、過去においても現在にあっても、そのすべてが愚かさだけであるわけではない。むしろ、それは恐怖と信頼の喪失に根ざしていると私は見る。

大体において私は心理学を軽率に持ち出すのは嫌いだ、この問題におけるすべての心理学的要素は重要だと思っている。私の考えでは、秘密、特にこれほど極端な秘密は、常に病気の症候だ。もしあなたが家族の中で秘密を持っているなら、それは恐怖、不安、および不信から生まれた病気である。これは地域社会、会社、社会全体にまで拡張され得るだろう。究極のところ、秘密に駆り立てるものは、基本的な信頼の喪失と、過剰な恐怖および不安によって生まれた、深い病理の症候である。

UFO/ET 問題の場合、1940 年代と 1950 年代の初期の頃は、パニックと隣り合わせの恐怖の時代だったと私は感じている。人類は壊滅的な世界大戦から抜け出す一方で、核兵器の恐怖が放たれたばかりだった。ソ連はその帝国を拡張し、より大きくより破壊的な核兵器で寸分の隙もなく自らを武装していた。そして、彼らは宇宙への競争で我々を打ち負かしていた。

このとき、地球外宇宙機がふと現れる。それは遺体となった生命体（一人は生存していた）と共に回収される。恐怖。混乱。答えの分からない、数え切れないほどの恐怖の疑問がわき起こる。

彼らはなぜここにいるのか？ 国民はどう反応するか？ どうしたら彼らの技術を安全に保管し - また我々の不倶戴天の敵からそれを守るか？ 世界最強の空軍がその領空を統制できないことを人々にどう説明するか？ 宗教的信念に何が起きるか？ 経済秩序には？ 政治的安定には？ 現在の技術の所有者には？ そして...

私の見解だが、秘密の初期の段階は予見可能で理解もでき、おそらく正当化もできる。

だが、数十年が過ぎ去り、特に冷戦が終わると、恐怖だけではこの秘密を説明することができない。結局のところ、1996 年は 1946 年ではない - 我々は宇宙に進出し、月に着陸し、他の恒星系に惑星を発見し、遙か遠くの宇宙に生命を構成する物質を見出し、人口の約 50 パーセントが UFO が現実であることを信じている。そして、ソ連帝国は崩壊した。

私の考えでは、二つの別の重要な要因が進行中である： 貪欲と支配、それと数十年間にわたる秘密の慣性。

貪欲と支配は容易に理解することができる： 進歩した地球外技術を解明し、応用するプロジェクトに関与しているありさまを想像してみよ。このような技術の能力と経済的影響力 - したがってその価値 - は、内燃機関、電気、コンピューターチップ、遠隔通信のあらゆる形態を合わせたものよりも大きい。我々は次の千年の技術について語っているのだ。あなたはコンピューター／情報時代革命を大したものとするか？ シートベルトをしっかりと締めた方がよい。やがて - 遅かれ早かれ - 進歩した ET 技術に基づく非線形、ゼロポイント技術革命が始まる。

疑いもなく、企業、軍産複合体の利害と秘密は、USAPS に関係している政府のそれをさえも凌ぐ。コカコーラの製造法など、これに比べたら何物でもない。

大きな秘密活動の官僚的慣性は、さらにもう一つの問題である。活動、虚言、国民への偽装とさらに悪いことの数十年を経て、このようなグループはどうやって自ら織りなしたすべての蜘蛛の糸を解くというのか？ ある種の人間にとり、秘密の権力には確かな中毒性の魅力がある；彼らは秘密を持ち、知ることでも力を得る。そして、この責任者、あの責任者と人々が大声を上げて言い立てる、一種の宇宙版ウォーターゲートになりかねないという不安な見通しがある。よってすべての官僚が熟達しているもの、すなわち現体制の維持がより容易な道となる。

そして、今でさえ恐怖はある。このゲート、あのゲートといったウォーターゲート時代の暴露されることへの恐怖ではなく、よそ者嫌いとは未知のものに対する恐怖である。これらの宇宙人は何者か、なぜ彼らはここにいるのか；許可も受けずに、どうして我々の領空に敢えて侵入したのか！ 人類は異なる者、知らない者、よそから来た者に対する恐怖 - および憎悪 - の長い歴史を持っている。人類の世界を荒廃させる、今なお暴れ回っている人種、民族、宗教、国家主義的な偏見と憎悪を見よ。未知の者や異なる者に対する、ほとんど習慣となったよそ者嫌いの反応が存在する。そして、確かに ET は、たとえばアイルランドのプロテスタントとカトリックが異なる以上に、我々とは異なる。

私は一度、UFO に関係した軍事と情報作戦に関わる一人の物理学者に訊ねたことがある。なぜ我々は、宇宙空間に設置した先端兵器でこれらの宇宙機の破壊を試みるのかと。彼はすぐに興奮して、こう言った。“この作戦を実行している連中はとても傲慢で自制心がないので、彼らは我々の領空へ UFO が侵入すると、どれも敵対行動をとるに値する攻撃的なものとみなす。だから、注意を怠ると彼らは我々を惑星間戦争に巻き込むだろう...”

だから、次のように言える。恐怖。未知のものに対する恐怖。貪欲と支配。組織の慣性。これらは、PI-40 の秘密を継続する現在の原動力として私が考えていることの一部である。

しかし、ここからどこに向かうのか？ 極度の秘密主義から公開へと、この事態をどうやって変えるのか？

極度の秘密、特にこれほど遠大で重要なものの秘密は、民主主義を土台から崩し、憲法を覆し、途方もない技術的能力を選ばれてもいない少数者の手に集中させ、惑星全体を危険な状態に陥らせる。これは終わらせなければならない。

CSETI（地球外知性体研究センター）プロジェクト・スターライトは、ほぼ 3 年間の活動の中で、証拠を収集し、現役および退役した政府、軍、情報機関、企業の証人たちを確認し、様々な世界の指導者たちに背景説明をしてきた。有給スタッフもおらず十分な資金もなかったが、不屈のチーム

の献身と奉仕の取り組みにより、多くのことが達成された。しかし、まだ多くの課題が残されている。ここにその一部を示す：

1995 年 6 月、我々は米国とロシアの軍および政府の重要証人たちによる会合を持った。そして、このような証人たちが処罰されずに話すことを許可する大統領令を発するよう、クリントン大統領宛ての請願書に全員が署名した。政府が議会と協力して公聴会を開催し、そこで現在 20 数人を超えるこれらの証人が、UFO/ET 問題について知っていることを公然と証言できるようにすることを、私は提案する。これは必ず決定的な公開になるだろう。この際、あなたが貢献できる方法は二つある：

1) 大統領に手紙を書き、これらの証人が安全に名乗り出てこられるように大統領令を発することを要請する。それと同時に、あなたたちの上院議員と下院議員に手紙を書き、これらの証人が語ることができるように公聴会を開催することを要求する。

2) もしあなたか、あなたの知っている誰かが、現在または以前の政府、軍、企業の証人であるなら、すぐに私に連絡してほしい。我々は保護手段を整えている。証人が多ければ多いほど主張は強化され、すべての関係者の安全性は高まる。できるなら、どうか我々に力を貸してほしい。

国際社会と国連は同様に、この問題についての公聴会を開催すべきである。我々には世界中からの証人がいる。だから、理想的には国際的な公開と証拠を収集する努力が直ちに開始されるべきである。

国際社会は傍観しているべきではない。それは秘密の活動に対する責任放棄である。CSETI は 5 年間にわたり市民外交の取り組みに関わってきた。そして、これらの地球外からの訪問者たちとコンタクトする手順の開発において、著しい飛躍を成し遂げた。我々はこれを受け身的に何か遠くの‘現象’として見ているのではなく、これらの生命体との交信を確立することを試みるべきである。そして、公然と惑星間関係の初期段階を開始すべきである。もしあなたが、このような研究と外交の取り組みに関与できるより詳細な方法に興味をお持ちなら、我々に連絡してほしい。

最後に、我々は許す覚悟を持たなければならない。現在または過去のいずれであれ、秘密に関与した人々を厳しく処罰する要求から得られるものは何もない。多くの人々はその当時、正しいことをしていると感じていたのかもしれない。あるいは、現在でさえも。我々に宇宙版ウォーターゲートは不要だ。我々は全員でそれを放棄しなければならない。我々は喜んで今と未来に目を向け、過去を許すべきである。これには先例がある。クリントン政権の初期に、エネルギー省と前の原子力エネルギー委員会内で行なわれた過去の行き過ぎた行為と狂気の実験について、全面的な公開があった。我々は、孤児院の子供たちのオートミールにプルトニウムが混入されたこと、‘何が起きるか’を見るために人口集中地域に故意に放射能がまき散らされたこと、等々を知った。この真実は明らかになったが、世界は終わりにならなかった。誰も投獄される必要はなかった。政府は崩壊しなかつ

たし、天は落ちてこなかった。前進しようではないか、幾らかの本当の同情と寛容とを持って。そして、この世紀を新たに始めようではないか。

つまるところ、人々が先導すれば指導者たちはついてくる。この事態を変革し、開放と信頼の時代を創造し、全世界と惑星間の平和の基礎を打ち立てるためには、勇気、展望、そして忍耐が必要である。もし我々の指導者たちが今この勇気と展望を欠いているなら、我々がそれを彼らに示さなければならない。我々の未来が奪われているときに、それを無視することはあまりにも危険な賭けである。地球の生命の未来と宇宙における我々の立場は危険に曝されている。共に、それを守るために働こうではないか。我々の子供たちと、その子供たちのために。

スティーブン・M・グリア 医師
CSETI（地球外知性体研究センター）代表
1996年5月21日

（訳：廣瀬 保雄）